

日本地震史料を読む

首藤 伸夫*

1. はじめに

ここでは、昭和 16 年に編者武者金吉として毎日新聞社より出版された日本地震史料を取り上げる。その経緯などに関しては、宇佐見龍夫の日本地震史料の恩人達（文献 1）が良い参考となる。これで取り上げられている地震は嘉永元年（西暦 1848 年）から慶応三年（西暦 1867 年）までの事象である。

2. 地震の予兆

2-1 気象の変化

〔三災録抄録〕○稲毛實著

○潮江の漁師に助左衛門と云古老有、平素能く天氣を察し、晴雨等を知る。此者去十一月五日の朝東の空にほのかに月影の見ゆるとて人々にも教へ、且潮の狂も甚しければ大變有べし、其用意すべしと隣家へも示しける由。五日の月の其朝よりあらはれ出し事天學者流の論も有べけれとも、予の家に來馴たる土民某も其月を俱に見たりとてみづから語ぬれば、聞儘を記しぬ。實に巻中の一奇談なり。再云、地震考（文政十二年七月六日洛中地震の事を記したる印行の書なり、書寫して追加に出す）に六月廿七日の朝いまだ日も出ぬ先に虹丑寅（註：北東）の間に立を見る、凡虹は日に向ひて立は常なり、いつれも常にあらざるは震の徴とや云んと有。

安政元年十一月四日（西暦 1854.12.23）（pp.309-310）

〔三災録抄録〕○稲毛實著

○井の尻浦の住御浦方浪人に山中久平と云老人有、隱居の後は孫らを連れて磯に遊ぶ事常なるが、去十一月の初より日々潮に狂出來たる

事と、一天に雲なき事等を考合せて家内を初、浦中へ近々の内大變あらん事を示して、家財共を運せ山に通れよと進むれとも、空なる事且運送の費もあれば浦人ともさまで信ぜざりし者も有。又此家には實永津浪の事の委敷筆記も有よしなれば、夫をも考合せて教る事ならんと信じて山居せし者多かりしが、其者共久平一統は何一つ恙なかりしなり。

變後久平いふ様は、かほど諸人の為に成事慥に知りたらば御浦方へ可申出ものをと後悔したるとなり。追加に書せる廣島氏と同日の談なり。高岡郡破損縮書に井の尻に就、十六軒流失十五町潮濱り女二人流死と有。井の尻の者ならば登山はせざりしと見へたり。俗に云所謂神佛に放されし者ならん。安政元年十一月四日（西暦 1854.12.23）（p.323）

〔安政乙卯武江地動之記〕○齋藤月岑著

安政二年乙卯十月亥二日千辰十月宥宿。

一、早旦下總國成田の山にて見し人の噂に、日輪紫色、しかも濃くして宛も忍んじもて色どりたる様に見え、人々怪しく思ひしに、同夜此大地震あり。零提子話、成田近は江戸よりは地震少よわし、石燈籠の類は覆りたるよし、是は雪旦子門人旦齋の話なるよし。

一、地震の少し前に洋の方に四斗樽といふものの大さなる物ありて左右へ分る。一つは房總の方へ趣き、一つは江戸の方へ趣くと見えしが、間もなく大地震あり。

安政二年十月二日（西暦 1855.11.11）（pp.566-567）

〔時雨廻袖 抄録〕○畑銀鷄著

○友人山田文三郎は號を重山といふ。古書畫を集る事をもて身の楽しみとせる好事家也。信濃岩村田の産にして、四五年以前より江戸に來り、深川六軒堀に住せり。此日要用有て品川宿に至り、夜に入て歸りける途中、芝神

*東北大学名誉教授

明前を通り過る時、天窓の上よりゲン引と云音響きける故、何心なく振り向き見れば、張子の大天窓程の坊主の首火の付たる木を喰へて、東より西の方へ飛行しとぞ。體半身顯はれて下の方は見えざるよし。重山是を見て面色土の如くに成、道を急ぎける折から、例の大地震動揺しける故一步も進む事能はず、二三度より倒されしが、漸にして起上りける時、兩側の町家残らず家根瓦を打落され、土藏は壁をふるはれけるが、其音恰も大山の崩るゝが如しとの話也。此怪異は浅草駒形邊の人々兩三人同刻に見たりといふことを話す者あり。

○余が旅宿の同村に伊右衛門といふ農民あり。其家へ日々雇はれて農事を助る彌助といふもの、此夜伊右衛門方に風呂立ける故、湯に入て夜話に及びけるに、早四ツ過にも成ければ、暇を告げて此處を出、道の程一丁も来たらんと思ふ時、天窓の上にて恐ろしき音しける故、何事やらんと仰ぎ見れば、鐘の如き眞黒なる物、東より西の方へ飛行けるとか、彌助是を見るより仰天して道を急ぎし折しも、忽大地震發りけるが、一步も進む事叶はず、立てば倒れ、起ればころび、おなじ處に居すくまり、漸にして此所を去りしといふ。此怪異いかなる物ならんや。殘草駒形邊にても、兩三人見たりといふ人あり。

○龜井戸より深川へ荷物を積贈りし船頭用向有て歸りに大橋邊へ立寄、舟を出しける處、殊の外波荒くなりける故、不審に思ひける折しも、根太板程の眞黒なる物幾つとなく空中を飛廻りけるを見て大いに恐れ、彌舟を早めて漕ける處、兩側の家居がた々と音して壊れけるが、其昔大雷の落たる勢ひなれば、初て大地震なる事を知りて、扱は今の飛物も浪の荒くなりたるも、全く地震の知らせにて有けると、初めて心付たりしとぞ。 安政二年十月二日 (西曆 1855.11.11) (p.600)

〔安政見聞誌抄録〕

△鈍亭主人話説す。拙子が一友榎本氏の一夕話に、駒込白山下なる質屋某の丁稚去卯年十月二日の黄昏に二階の板戸を鎮せんとて上り

たるが、暫し有て梯子を下ながら打つぶやくやう、今宵定て地震の愁有て、しかも震動つよからんと云獨説けるを、番頭聞もあへず、不祥の事を云奴かな、灯せよ疾下よと叱こらして其儘に有けるに、果て其夜の天災に家倉を破損し、其家内辛じて身を脱れ、一同恙なかりし、去ば七日間の野宿せしを傾たる家を取り繕、いづれも素の家居に入て、各安堵せしが、彼丁稚の云たる事を思ひ出して、主人に一々の由を告るに、主入も訝しく思ひ、其丁稚を招き尋けるに、丁稚答て云、僕の父は信州の者にて、常に語るには、善光寺開帳の時地志ん有たる日の夕に、西方に白雲霞のごとくたなびき、又東の方に諸つくねいもの如き雲出たり、其夜彼國の大地震也、又暫有て元の如き雲東西に出たり、是必揺返ならんと彼雲を見たる徒には、家財を廣原にはこび身を竹林にひそめ居に、果して其夜も又大地震有しと語たるを覺へ居て忘ざりしを、彼二日に其雲の顯れたるを以、思はず申たる也とかなりぬ。夫子は童謡を信じ班固は巷談を因とす。俗説も棄べきにあらず。況や實地の現證をや、野夫にも功の者とは是等の事成べし。 安政二年十月二日 (西曆 1855.11.11) (pp.623-625)

〔安政見聞録抄録〕○服部保徳著

○卑賤の老夫天變を知るの條

こしに二三千石を領する家あり。その門番なる老夫ありて、年来老實に仕へける、元來卑賤にして文學もあらず、尋常の叟なりしが、十月二日の薄暮に至り、門外に出て四方を瞻けり、たちまちに内に入その同僚に示していはく、今宵かならず地震ありて、その動揺はげしからん、家に居らば怪我あるべし、兼て用心をなすに若ず、其用心とは他ならず、第一に食物なりとて、暴に少しの米を炊ぎ、勝手に入りてこれを焚く。同僚は聞て諸共に米を炊ぎ焚もあり。頓て老夫は莊内を馳まはりて人々にそのよしを告げるに、これを信ずる者もあり、また彼老夫何をか知らん、それ天變地妖の如き賢人君子も知る事難し、況やかの老夫をや、思ふに狐狸に變詐されて、かゝる謠言をいふものならん、と多く嘲り畿りけ

り。老夫は飯を焚終り、これを小さき櫃に入れ、味噌香の物など取添へ、裏の方なる馬場へ持ゆき筵を敷て其處に居れり。同僚もまたこゝへ来て、居るもの總て三四個、さまざまの雑談に、はや成刻も過ぎ寅刻も近づく、しかれどもさせる事なし、この夜天色暖にして、寒冷にあらざれども、時これ十月の初なれば、久しくこゝに居るに堪ず。老夫に騙されし心地して、我部屋に歸るものあり、また大にこれを信じて、いまだ夜半にもおよばぬを、心短く歸ることかは、と猶こしに居るもあり。兎角する間に夜廻りの柝ははや亥刻なり。この時天色朦朧として、半天に雲覆ひ、星の光り近く見ゆ。老夫は猶四方を視やり、物もえいはず獨點頭、かゝる折から旋風の暴に落すが如き音して、大地忽ち鳴動なし、四邊の草木波のごとく、屋舎の崩るゝ音耳を貫く。老夫は偕こそと筵の上に駢と坐して俯き居たり。暫時ありて動揺静まり、老夫を始め圓居しものども徐々と立ち出て、莊内を見巡るに、或ひは家の潰れし方あり、或ひは桁落梁をれて、これに壓れ死するもあり、また手足を摧かれて、死もやらず呻くもあり。子は親を索ね親は子を喪ひて泣叫ぶ、そのさま更に目もあてられず。奥はいかにと行て見るに、是また大に崩れ損じて、往べき方へはえもゆかれず。火爐には物の覆ひかゝりて、既に火の燃んとするにぞ、老夫は同僚にかくと告て、水を汲来りこれを消し、まづその恙なきを得たり。かくて後この家の主人この事を聞て、老夫を召し、汝何とてこれを知る、實に汝なかりせば、この家忽ち焼土とならんを、火を鎮め莊内を見廻りしこそ功績なれ、と數多の褒美を賜りければ、老夫はこれを謝していふやう、下僕卑俗凡夫にしていかでか天地の變を知るべき。但しこの身不幸にして、若年より今に至りかゝる地震に三度あひぬ。下僕は元越後の國三條の生れにて、去ぬる文政十一年三十ばかりになりけるが、大地震ありて家潰れ、死するもの數を知らず。下僕僥倖にその難は免かれけれども、失火に遭て家財農具残りなく焼失ひ、詮方なくて迷ひ出、隣國なる信濃へゆき、こゝに月日を送る程に、弘

化四年二月に至りまたかの國大地震あり。折しも善光寺如来の開帳いと賑はしくて、國々より参詣の人夥く、こゝに集會たるもの故に、即死怪我人多かりしは、人の皆知る所、さてその節も僥倖に恙なくて、それより後江戸へ来り年久しく御恩を蒙ふり候なり。然るに最初三條にて大震にあひし時、博識人のまうしゝには、凡大地震のあるときは天色朦朧として空近く、星の光り常に倍す、また温暖なるもの也、と聞たるを今に忘れず、毎夜空をうちながめ、星常の如くなれば心を安んじて候ひしが、信州地震は二月にて彼國別て寒氣強きに、この頃すべて温暖なるさへ、常には變ると存ぜしに、その前夜より星の光り殊に大きくして昂參の中の小星、俗に糠星と唱ふるものも、鮮明に見ゆるのみか、鳶舞ひ鴉噪ぎ立、雉子聲を和す事あり。都てこれ地震の兆と、親しき人にもこれを告、竊に準備なしけるが、果してその翌晩に大地震になりけれど、準備せしまゝ怪我もなさず。されどまた此處にても家財盡く失ひぬれば、詮方なくて江都へ出ぬ。思ふに老若數を盡して、死したる中に恙なきは、全くその前兆を聞おきたる故なりと、夫より後はいよ々々信じて空を候がはざる夜とてもあらず、然るにこの一兩日また地震の兆ある故、其當否は存ぜねど人々にも告たりしが、卑賤の者のいふ事と侮り給ひし人々は多く過給ひけり。またそれを信ぜし人ばみな恙なく在するこそ下僕が歡びなれ、といひたりしかば、主人は聞て野夫にも功の者ありとは當にこれらの事なるべし、と大に歎息せられしとなん。安政二年十月二日（西暦 1855.11.11）（pp.625-626）

〔時雨廼袖〕○畑銀鷄著

同廿六日晝七ツ時、是も餘程のことにて、おのれ根津七軒町に居たりしが、錢湯に入たる人々皆裸にて飛出したり。此日八ツ時頃、舟橋彌助といへる友人葛籠の破れたるを繕んとて、反古を取出し、一枚宛重ねて居ける處、其反古四五枚座敷中を舞歩きて、庭先へ落たり。彌助是を見て、今微しの風もなきに斯の如く舞ひ上ること最不審也、是は又地震のす

る兆しかも知すと心付しが、其如く其日七ツ時地震せり。又其夜七ツ頃も震ひたり。

安政三年四月廿六日 (西暦 1856.5.29) (p.665)

2-2 海の異常

〔橘黄年譜抄〕○栗園陳人著

十一月四日○安政元年江戸大震、此日相州箱根山特ニ甚シク二子山ノ巖石崩落、道路ヲ壓塞ス。豆州下田港ハ加之ニ海嘯ヲ以テシテ、市街十八坊流失シテ平原トナリ、溺死八十五人ニ及ト云。此震災京師ヨリ四國中國十州ニ及ビ、土佐高知豊後府内最甚ト云。川路氏曰、此日余命ヲ奉ジテ下田ノ官舎ニアリ。時ニ里老来リ告曰、今朝海潮常ヨリ減ズル事一里許、恐クハ海嘯アラン。五十年前是ノ徴アリ、早ク避クヘシ。因テ皇遽山上寺院ニ逃ス。無幾_ニ大湖山ノ崩ル、如ク數千人ノ戸烏有トナル。安政元年十一月四日 (西暦 1854.12.23) (p.436)

〔安政見聞誌抄録〕

△本所永倉丁篠崎某なる人遊漁を好、十月二日の夜ずいこといへるものにて鰻をとらんと河筋所々をあさるに、切に鯨騒、鰻一つも得ず。唯鯨三尾を得て情思ふやう、鯨の騒ぐ時は必地震有といふに心付て、漁を止、帰宅して庭上に蓆を敷、家財道具を出して異變の備をなせり。其妻は不審密に笑之。爾るに其夜右地震なり。住居は悉潰れけれ共、諸器物は更に損せず。偕亦同夜近邊の人、是も漁に行、鯨の騒たるを見ながら帰宅をせず、又獲物も少き上家居より家財道具を残なく揺崩し深く悔しが、右篠崎氏は其心さとく、一つの難を脱たる事は全世説俗談といふ共、能心付たるは一條の徳にして、油斷せしは我過なりと予に談せし人の有り。是等は自然の道理にて、地に變動あらん時は、且鯨の騒事あらん。此因により、地震を鯨なりと云もし、晝にも書事ならん。何れ前條の現證を見て後世の鑑ともたらんと爰に示す。安政二年十月二日 (西暦 1855.11.11) (p.623)

2-3 異常な物音

〔静岡縣駿東郡誌〕

嘉永七年霜月四日朝の五ツ半 (午前九時頃) 冴え渡りし初冬の空は、平和の村里を包みて一際清かりし折、何方ともなく大浪の寄するが如き響あり、人々怪しみ、雷鳴か、海嘯かとの疑問は、一瞬ならずして解決せられたり。其鳴動こそ將に來るべき大地震の前徴なれ。鳴動と共に天は叫び地は震ひ、家屋は將に顛倒せんとす。すはこそ大地震よ、早や逃げよと呼はりつゝ、倉皇戸外に出でしも歩行すること能はず、唯地上に轉輾するのみ。砂煙は天を蔽うて暗く、逃げ後れたる老幼は屋下に倒れ、阿鼻叫喚もの凄く、辛うじて逃れ出でたる者共は、かしこの竹藪、こゝの芝生に打集ひ、震動の何時止むべきかと互に顔見合せて、恐怖と危懼とにたゞ茫然たるのみなりしと云ふ。安政元年十一月四日 (西暦 1854.12.23) (pp.461-462)

2-4 異物出現

〔大地震大津浪末代嘶廼種〕

十一月五日夕大津波突來る前に大坂の西前垂嶋といふ處へ丈け二丈ばかりの高坊主出たり。人々是を見て膽を潰しアレヨ々々といふうち海に入陸に向ひ手にて水をかける如くして姿見へず成と間もなく大津浪突來る。是此變を告しならんと後に思ひ合しける。

安政元年十一月四日 (西暦 1854.12.23) (p.428)

2-5 井戸・地下水の変化・大地の異常

〔津浪略記〕三重縣北牟婁郡錦町金藏寺藏

然る處同曆十一月初四日、是も辰の下刻と存時大地震、青山の樹木、堤・家藏・納屋に至る迄崩るゝ程の如く、家棟梁瓦土風に吹落す塵埃誠に霧の如く、前後人足の踏場なく、十方に暮て影姿も幽なり。乍ち巳の上刻に至て津波起り、磯邊に涌出て上る事二丈餘り、浦人山野に出て樵漁或は農に趣き、家業のみの折柄故、親は子を尋、子は親を慕て泣叫聲、或は浪に漂て溺れ死する者もあり、歎かんや。家財不残一時一朝に盡流失す。

.....

老人の傳聞、津波の満る前には潮井戸干といふ事を聞もの多し。其れ故地震の時則井戸を

覗き、潮を見渡せども、聊も其の例なし。安
政元年十一月四日（西暦 1854.12.23）（pp.459-460）

〔時雨廼袖〕○畑銀鷄著

浅草御藏前通り天王橋の邊りに、一軒の水茶屋有、九月下旬駕籠の者此店へ休んと、客を乗せながら入口の土臺をまたぐに、沓脱の土間抜けたる故、驚き是を見るに、清水混々として湧出る。人々あやしみ種々説を唱へ居ける處、十月二日の大地震なり。昔より大地震のきざし有時は井の水濁り、又は涸などする事有よし。是皆水脈くるふて然らしむる處ならん。此渚水の縁なき處へ吹出せしも、皆水脈の變のなす所にや。安政二年九月十一日（西暦 1855.10.31）（p.475）

〔安政見聞録〕

こゝに去年十月二日大震の前なりしが、浅草御藏前は福田屋といふ水茶屋のありけるが、駕に乗りて来る人あり、轎夫庭を徘徊なし、少し凹みたる所あるを何心なく杖にて突に忽地清水深々と湧出て流れければ、主人これを見て大に駿き、立よりてその傍を穿に、いよ々々清泉湧出れば、人々これを奇なりとして競ひ見るもの市の如し、主人は桶の底を抜き是を覆ひて井の如くし、汲とりて茶を煎ずるに、その味また美なり、これを見聞く人毎にたゞ不測の事なりといひて地脈の狂ひしに心は著す、然るにそれより四五日を過てかの大震ありしなり、○中略こゝを以てこれを思ふに地脈くるひて水道の差ひぬること疑なし、されば福田屋の庭中に暴に清泉の湧出も當に地震の前兆なるべし、余近頃その水を見しに青く濁りて苔を生じ、なか々々に飲に堪ず、是よりまた數月を経ばいかなるらん知るべからず。

安政二年九月十一日（西暦 1855.10.31）（p.475）

〔安政見聞誌抄録〕

△浅草かや丁大すみといふ眼鏡屋に三尺有餘の磁石を所持す。然るに彼の二日の夜五ツ時頃とかや、彼石に吸つけ置たる古釘古錠其外鐵物悉く落たりとなん。亭主は見るより大き

に驚き、我強あながちに此石を賣んとは思はねども、見世の看板或ひは又珍らしく大きな故大名衆の目にも留らば幸ひならんと据へ置しも、鐵を吸はねば只の石なり。定めて多くの年を経たれば、自然其氣の薄らぎたるか、大きな損毛ぞと心よからず。更る夜の四つ時の大地震なり。其後彼石に鐵を吸すに元のごとくに付によつて、大地震有其前には磁石鐵を吸はざるを發明せしとの咄しのよし。

安政二年十月二日（西暦 1855.11.11）（p.625）

〔橘黄年譜抄〕○栗園陳八著

冬十月二日夜二更過都下大地震、其初海中ヨリ電光ヲ發シ、水邊及卑濕ノ地特ニ甚シク高燥ノ地ハ稍輕シ。……此日早朝余ガ知己本石坊第三街伊勢屋太助ノ家ニト者年七十餘ノ翁來リ告曰、今夕恐クハ大震アラシムベシト。主人驚テ其故ヲ問バ、答曰余毎朝起テ井中ヲ試ニ、今日水減スルコト數尺、故ニトスト。主人亦其井水ヲ見ルニ果然リ。是即天然ノ地震機記シテ後鑒（注：カン、ケン、かがみ、かんがみる）トス。安政二年十月二日（西暦 1855.11.11）（p.628）

〔むし倉後記續篇〕○松代藩家老河原綱徳著
江戸大地震雜記

○萬歳業鯨大危事抄

此書ハ例の樂書同様之ものなれ共其中ニ實説らしき事斗を抄出ス。

九月廿一日藏前福木の庭へ清水湧出候、是地震の前表ならん、安政二年十月二日（西暦 1855.11.11）（p.661）

〔橘黄年譜抄〕○栗園陳八著

冬十月二日夜二更過都下大地震、其初海中ヨリ電光ヲ發シ、水邊及卑濕ノ地特ニ甚シク高燥ノ地ハ稍輕シ。……此日早朝余ガ知己本石坊第三街伊勢屋太助ノ家ニト者年七十餘ノ翁來リ告曰、今夕恐クハ大震アラシムベシト。主人驚テ其故ヲ問バ、答曰余毎朝起テ井中ヲ試ニ、今日水減スルコト數尺、故ニトスト。主人亦其井水ヲ見ルニ果然リ。是即天然ノ地震機記シテ後鑒（注：カン、

ケン、かがみ、かんがみる) トス。安政二年十月二日 (西暦 1855.11.11) (p.628)

2-6 理由不明

〔三陸沿岸海嘯史〕○昭和八年三月一四月東京日日岩手版所載

安政二年には江戸に大地震があったが、其の翌年安政三年七月廿三日三陸海岸に津浪が襲来した。此の日朝から地震があったが正午頃の大地震で津浪が起ったのだ。當時青葉のころには津浪がないと傳へられてゐるので油断してゐたため被害がかなり多かった。其の後快晴の日は幾日も續いたので、罹災者は毎日幾度となく襲ふ地震におびえて裏山に逃げ上り、バラックを建てたりして避難して居たが何時になつても地震が納らないので、大槌方面では小槌神社に群集して御祈りを上げて地震の鎮まるのを祈った。廿九日の朝は西風で快晴であつたが、夕方になって大雷雨が来たので山の中に避難して居た人達も堪えられなくなって、自分の家に一週間目に歸つて來た。(pp.672-673)

私事であるが、1980年代に岩手県沿岸で経験したことがある。そこは海水浴場であつたが、急を告げるスピーカーもなかった。村長さんに会う機会があつたので、スピーカー位着けたらどうですかと云ったら、猛烈な勢いで叱られた。「あそこは夏場しか人はいない。昔から青葉の頃には津波はないと言われていゝ。だから、急を告げる装置などは要らない。何と云うもの知らずなのか」。しかし、現在はスピーカーは設置されている。

2-7 狐憑きの言葉

〔時雨廻袖 抄録〕○畑銀鷄著

○牛込邊に一人の狐つき有しが、十月朔日不計口ばしり云ひけるは、明二日の夜は天變あれば、我は四五日歸りて來らず、皆々とも早く災をさけ賜へといひて何れへか走り出でける。跡にて皆々打寄、又狐つきが何かいひ出せしとて笑ひ居ける處、例の大地震なれば、其後人々膽をつぶして、此話しに及びけると

ぞ。峰崎慶順といふ醫師の話しなり。安政二年十月二日 (西暦 1855.11.11) (p.603)

〔安政見聞誌抄録〕

△牛込矢来下の邊に小東次といへるものあり。是に狐の魅て有しが、右十月二日午刻近邊の人に告て云やう今夜かならず天災あらん、何れも心して危を逃給へ、我は安全の地へ立退んといふゆへ、其譯を尋んと止る人々を刎退つき倒、駈出行方知す成けり。因之心有人々は荷物を取片付色々用心の體を見て嘲笑す。狐つきの戯言を信じ今より立騒ぐ事とおかしと大に誹たるに、其夜彼地震有しかば、東次の詞を始てさと、後悔せし人も多かりけり。扱又地震しづまりて後も、かの狐魅の家に返らざる間は、いまだ余動も有ならんと、此事を傳へ聞たる人迄安き心はなく、猶又所々の火災も有し事ゆへ、崩家又は傾たる所より荷物家財等を持出し、襖障子等を壁とし、些の寒氣を凌のみにて人々枕にも着ず、夢の葉なるうち彼狐つき返きたりしかば、人々偕はもはや難もなかるべしと思ひ、狐魅の東次に足下は何所へ逃行しと向ふ。微笑して凡俗の知る事ならず等いひしが、各安堵して其家を取繕、素の如く家業をなしける。爾の右狐も脱て元の身と成しとぞ。安政二年十月二日 (西暦 1855.11.11) (p.624)

3. 津波発生目撃談

〔伊豆半島地震史料〕○福富孝治編
仁科村 濱

安政元年十一月四日津浪の災害は吾父南洋の時折りの座談にも聞及び居るものにして、當時其附近の農夫、岩科奥の高燈籠(烏帽子岳?)とか、高天神とか俗稱せらるゝ高峰にて目撃したる話なりと云へるを聞くに、大砲如き響と共に、海上七八里、瀬の海邊に水煙天に漲り、水面凹となり、大水輪をなして四方に開けるを傳へたり。安政元年十一月四日 (西暦 1854.12.23) (p.231)

西豆村八木澤

安政元年十一月四日大地震，東北に當りて震動止まず，暫時にして大溢浪，下田岡方災に罹る。千餘戸僅かに十餘戸を存す，又松崎灣怒濤家屋田畠を潰し一時に海原となし，宮内村の中央まで大船の帆柱を押上ぐ。此時伊濱村の西方海上七八里大砲の如き響ありて，水煙天に漲り，水面凹となり，大水輪をなして四方に開けり。蓋し該所に火脈の破裂せるを以て溢浪を起したるなるべしと。沿海諸村落の罹災之に準じて知るべし。(碓氷氏記)

安政元年十一月四日（西暦 1854.12.23）(p.232)

この津波発生は，明治 25 年（1892）に設立された震災予防評議会が，同年に静岡県に古地震資料の収集を依頼し，その報告中にも述べられている。(文献 2)。現代語に訳すと「伝聞
伊豆加茂郡三浜村に伊浜と云う村落がある。村の北の高燈籠山は，海際にそびえる高い山で極めて見晴らしが良い。村人が秣をとる場所である。安政元甲寅歳十一月四日（1854 年 12 月 23 日 9 時）ある人がこの山に登ると急に大地が大きく揺れた。と共に，西方に百雷の響のような大音響がした。そちらを眺めると巨大な水柱が空高く登り，海は真っ暗になった。かと思うと，巨大な水輪に変化して

一つは下田伊豆諸島に向かって進行し，また一方は駿河湾に向かって進んで行った。水柱の立った所は今ではお盆のようにへこみ，ついでまた立ち上がり，数回凹凸を繰り返してやっと収まった。・・・後で聞くと海嘯だったという。」

高燈籠山は，現在高通山と呼ばれているようである。

〔増訂豆州志稿〕

安政元年甲寅十一月四日地大震，・・・

又松崎灣怒濤家屋田畠ヲ潰シ，一時ニ海原トナシ，宮内村ノ中央マデ大船ノ帆柱ヲ押上グ。此時伊濱村ノ西方海上七八里程大砲ノ如キ響アリテ，水煙天ニ漲リ，水面凹トナリ，大水輪ヲナシテ四方ニ開ケリ，蓋該所ニ火脈ノ破裂セルヲ以テ溢浪ヲ起シタルナルベシト。

沿海諸村落ノ罹災之ニ準ジテ知ルベシ。

安政元年十一月四日（西暦 1854.12.23）(p.307)

これは，1854 年の事であるが，イタリアでは，1783 年 2 月 5 日にギオイア灣で見られている。(文献 3)

4. 庄屋岩吉の津浪教育

安政元年十一月四日（西暦 1854.12.23）の安政大地震の時である。

「○伊勢南島古和浦津浪之事。

十一月四日五ツ時過，沖方歸り来る漁船，古和浦口前處かねて運上を取村役人なり之前，魚を積並べ，直段を付け居る處へ，大地震に付，各居宅へ走り歸らむとするやいなや，大地方泥を吹出し沖方山の如き大浪来り，人家之屋根之上を越江，一圓海中に相成，諸人山へ登りこれを避く，尤去る六月十四日地震之時も，津浪を恐れ，諸人山に登り，七八日も山住居致し候故，此度も地震の初めより，誰教ふるとなく，子供より騒ぎ立ち山に登りし故，如斯之大津波にも死人少く，全神の御加護と難有存じ候よし。(p.149)」と云う記録がある。



表-1 三重県に被害を主な地震(文献4より)

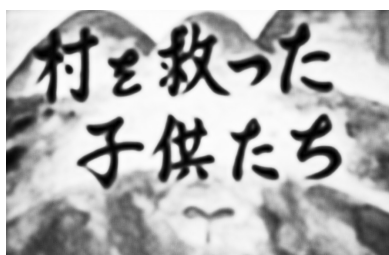
1605.5.2.3 (慶長9)	(慶長地震)	7.9	南海トラフ沿いの巨大地震。沿岸部に津波来襲。
1707.10.28 (宝永3)	(宝永地震)	8.6	南海トラフ沿いの巨大地震。尾鷲付近で、死者1,070人以上、家屋流失1,510棟。その他県内で、死者57人、負傷者73人、家屋全壊2,333棟、同流失601棟。
1854.7.9 (安政1)	伊賀・伊勢・大和及び隣国(伊賀上野地震とも呼ばれる。)	7 ¹ / ₄	伊賀上野付近で死者約600人、家屋全壊2,000棟余、周辺でも被害あり。
1854.12.23 (安政1)	(安政東海地震)	8.4	(東海道沖の巨大地震。強い揺れ及び津波により、関東から近畿にかけて被害。住家全壊・焼失約30,000棟、死者2,000~3,000人。)

この年は、上記にもあるように、6月14日に地震があり、山へと津波を恐れて避難する騒ぎがあったが、此の時は津波は襲来しなかった。ここへ津波が来たのは、表-1にあるように150年程前の宝永3年であった。

普通なら、直前6月の地震時に津波が無かったのに、十一月の地震時にも直ぐ津浪避

難行動を取った、しかも子供たちが騒ぎたち、大人がこれに従ったのには、何か理由があったに相違ない。それが、子供への地道な教育、地元古和浦の庄屋岩吉が行っていた津浪教育であったと思われる。

その内容は文献5に述べられていて、次の通りである。



①江戸時代、古和浦の庄屋・岩吉は暇があると子どもたちを集め、この土地の話を聞かせた。特に、庄屋の家に代々伝わる文書に書かれている「宝永の地震」(1707・10・28)のことは詳しく話した。

子供たちは、岩吉から「大地震があつて、津波が来ると思ったら山へ逃げないかん。」と教えられ、家に帰ってから家族にもその話をした。



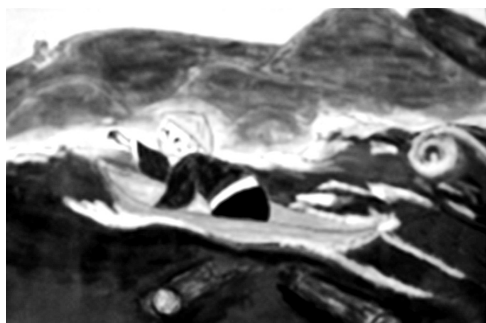
②その年の6月14日の昼すぎ、昨夜の小さな地震に続いて、大きな地震があった。子どもたちは、口々に「地震だー」「山に登れー」と叫びながら、山へ登り始めた。子どもたちの親を含む、多くの大人がそれに続いて山に上った。その日は夜にかけて、さらに2度地震があり、地震や津波の恐怖から8日間も山を下りられない者も現れた。村では、山に逃げたことについてうわさ話がなされた。



③その年の11月4日の朝は、西の風が吹く穏やかな日だった。朝8時すぎ、突然地面が大ゆれにゆれて、立ってられないほどの大地震が起こった。人々のある者は地べたに座り込み、ある者はいつくばった。子どもたちは皆大声で泣いた。



④しばらくして地震は治まった。子どもたちは岩吉の言葉を思い出し、前と同様に叫びながら山へ登った。その後ろから、老人たちを中心とした村人たちが山に登った。その頃、村には津波が迫っていた。



⑤しばらくすると、海の方から助けを求める声が聞こえてきた。声のする方を見ると、辺りは一面の海原となっていた。海辺の家はほとんど屋根まで浸水していた。声の主は船の上で網を直していた老人だった。村人たちは何とかできないかと考えたが、津波による引き波によって船は転覆し、村人たちの目で老人は波にさらわれた。



⑥津波が去った後で村に降りると、地面はドロや砂だらけだった。
家々は流され、つぶされ、家の跡すらわからない所が多かった。防波堤の石垣は崩れていた。



⑦岩吉は、子どもたちのおかげで村人がたくさん助かったことで、子どもたちに感謝した。この体験を子孫に語り伝えることも託した。

」

防災教育など推奨もされない時代、地震の度に小舟に逃げ込み津波で被災することを繰り返していた大阪などの例を考えると、庄屋岩吉を動かしていたものは何であったのだろうか。

5. 眞説「いなむらの火」

『これは、ただ事でない。』とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、……長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない不気味なものであった。……村から海へ移した五兵衛の目は、忽ちそこに吸付けられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、広い砂原や黒い岩底が現われて来た。『大変だ。津波がやって来るに違いない。』……家にかげ込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛び

出して来た。そこには、取入れるばかりになっているたくさんの稲束が積んである。『もったいないが、これで村中の命が救えるのだ』と、五兵衛は、いきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあおられて、火の手がぱっと上った。……自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまうと、たいまつを捨てた。……」

これが防災教育の名作、小学校5年の国語教科書に使われていた中井常蔵「いなむらの火」である。

だが、安政南海津波を体験した浜口儀兵衛の実際の行動は違うという。

杉村楚人冠「浜口梧陵伝」に掲載されている浜口梧陵手記では以下のようになっている。

「11月5日午後4時ころ、大震動。それが静まった時、家族を避難させ村を巡回した。逃げ遅れた人を助けているとき、波が来たとの声があり、左手の広川筋に津波が数町もさかのぼっており、右側の人家は物凄い音とと

もに崩れ落ちていた。

津波に捉まり、浮き沈みしながらも何とか丘に漂着した。振り返れば、一気に流されているもの、流木に捉まって何とか助かっているもの、まさに悲惨の局であった。

八幡社の境内に行くと、避難して来た者で騒然としていた。

日も暮れてきたので、若者 10 数人に松明を持たせ、道を下ってみたが、家材などが道を塞ぎ自由に歩けない。そこで、道端の 10 余の稲むらに火をつけ、漂流者に安全な場所への道しるべとした。これが役に立って万死に一生を得たものが少なくなかった。こうしながら一本松まで引き上げてきたとき、轟音と共に激浪が襲い来て火のついた稲むらも流されて行った。波は前後 4 回きたが、この時が一番大きかった。」

杉村楚人冠が本名廣太郎として書いた〔濱口梧陵傳 海嘯襲来（廣村の盛衰小史）〕でもほぼ同様のことが述べられているが、

「海嘯の襲来と見るや、彼は先づ家族を安全なる場所に避けしめ、次で番頭茂兵衛と共に、あわて惑ふ村民を一人も残らず避難せしめんとて、その身の危きも忘れて踏み留りゐたり。その中逃ぐる限りの者は逃げ去りて、最早四邊に一人の影も見えずなりたれば、今は心安しと、彼が最後に身を逃れんとせる途端、波浪は愈々高く打ち寄せ来つて、あはや、彼をも一呑みにせん勢にて迫り来れり。彼は宛がら狂人の如くひた走りに走れり。されども、如何にせん、激浪の追ひ来ること甚疾くして、將に其の顎に捕はれんとせし一刹那、彼は礮と村を通して流るる一條の川流に突き當れり。今は唯之を越ゆるの外に逃るべき道なし。その川幅は凡そ二丈、平常ならば逆も飛び越え得べきものにあらざりしが、さても神護か、彼は難なく之を飛び越えたり。と見る間に濤は全く此の流に硬かれて、追撃の力を弱めたるより、彼は其の暇に小高き山際に走り、漸く生命を完うするを得たり。

斯くて彼は漸くにして八幡山に辿り着き見れば、村民の大部分は早くも難を避けて其處に

ありしも、日は何時しか暮れて暗夜咫尺を辯ぜず、唯暗中水の音と共に、彼方此方に奔馳する人々の怒號と、迷路を失ひて救を求むる老幼の叫喚を聞くのみ。彼は此等の途を失ひたる者を救はんが為に、壯者を促して松火に火を點じ、別に田の畔に積みある稲村に火を放ちて、道に迷へる者の目標としたり。彼が此の臨機の奇策に依つて難を免れたる者その数を知らず。」安政元年十一月四日（西暦 1854.12.23）（p.265）

しかし、日本地震史料に掲載されている濱口梧陵手記は、これとやや異なっている。上記の杉村楚人冠では、川を飛び越えたとしているが、川を伝わる津波に捉まっている。

「安政元年海嘯の實況（濱口梧陵手記）

嘉永七年十一月四日四つ時（午前十時）強震す。震止みて後直に海岸に馳せ行き海面を眺むるに、波動く模様常ならず、海水忽ちに増し、忽ち減ずる事六七尺、潮流の衝突は大阜頭の先に當り、黒き高浪を現出す。其狀實に怖るべし。

傳へ聞く、大震の後往々海嘯の襲ひ来るありと。依つて村民一統を警戒し、家財の大半を高所に運ばせ、老幼婦女を氏神八幡境内に立ち退かしめ、強壯氣丈の者を引き連れて再び海邊に至れば、潮の強揺依然として、打ち寄する浪は大阜頭を殛し、碇泊の小舟岩石に觸れ、或は破れ覆るものあるを見る。

斯くて夕刻に及び、潮勢反つて其力を減じ、夜に入つて常に復す。然れども民家の十中八九は空家なるを以て、盜難火災を戒めんが為、強壯の者三十餘名を三分し、終夜村内或は海邊を巡視せしめ、且つ立退きたる老幼姪に粥を分與し、僅かに一夜の糧に充てしむ。

五日。曇天風なく稍暖を覚え、日光朦朧として所謂花曇の空を呈すと雖も、海面は別に異狀もなかりしかば、前日立退きたる老幼姪に安堵の思をなし、各々家に歸り、自他の無異を喜び、予が住所を訪ひ前日の勞を謝する者相次ぎ、對話に時を移せり。午後村民二名馳せ来り、井水の非常に減少せるを告ぐ。予

之に由りて地異の將に起らん事を懼る。果して七つ時頃（午後四時）に至り大震動あり、其の激烈なる事前日の比に非ず。瓦飛び、壁崩れ、塀倒れ、塵烟空を蓋ふ。遙に西南の天を望めば黒白の妖雲片片たるの間、金光を吐き、恰も異類の者飛行すると疑はる。暫くにして震動静まりたれば、直ちに家族を促し、自ら村内を巡視するの際、西南洋に當りて巨砲の連發するが如き響をなす数回、依つて歩を海濱に進め、沖を望めば潮勢未だ何等の異變を認めず。只西北の天特に黯黒の色を帯び、恰も長堤を築きたるが如し。僅かに心氣の安んずるの違なく、見る々々天容黯澹、陰々肅殺の氣天を襲壓するを覺ゆ。是に於て心竊に唯我獨尊の覺悟を定め、牡者を勵まし、逃げ後るゝものを扶け、侶與に難を避けしむる一刹那、怒濤早くも民屋を襲ふと呼ぶものあり。予も疾走の中左の方廣川筋を顧れば、激浪は既に數町の川上に溯り、右方を見れば人家の崩れ流るゝ音悽然として膽を寒からしむ。瞬時にして潮流半身を没し、且沈み且浮び、辛じて一丘陵に漂著し、背後を眺むれば潮勢に押し流さるゝものあり、或は流材に身を憑せ命を全うするものあり、悲慘の狀に忍びず。然れども倉卒の間救助の良策を得ず。一旦八幡境内に退き見れば、幸に難を避けて茲

に集る老若男女、今や悲鳴の聲を揚げて親を尋ね子を捜し、兄弟相呼び、宛も鼎の沸くが如し、各自に就き之を慰むるの違なく、只「我れ助かりて茲にあり、衆みな應に心を安んずべし」と大聲に連呼し、去つて家族の避難所に至り身の全きを告ぐ、勿々辭して再び八幡鳥居際に来る頃日全く暮れたり。是に於て松火を焚き牡者十餘人に之を持たしめ、田野の往路を下り、流家の梁柱散亂の中を越え、行々助命者數名に遇へり。尚進まんとするに流材道を塞ぎ、歩行自由ならず。依つて従者に退却を命じ、路傍の稲村に火を放たしむるもの十餘、以て漂流者に其身を寄せ安全を得るの地を表示す、此計空しからず、之に頼りて万死に一生を得たるもの少からず。斯くて一本松に引取りし頃轟然として激浪来り、前に火を黙ぜし稲村浪に漂ひ流るゝの狀觀るものをして轉た天災の恐るべきを感じしむ。波濤の襲末前後四回に及ぶと雖も、蓋し此時を以て最とす。」安政元年十一月四日（西曆 1854.12.23）（pp.266-267）

6. 津波碑

津波碑の中でも、地震や津波の詳細を記したものを以下に紹介する。



写真-1 香南市香我美町岸本にある飛鳥神社の北東の隅の玉垣の内側に飛鳥神社の地震の碑（文献 6）

6-1 高知縣香美郡岸本浦飛鳥神社

土佐國群書類従所載〔地震日記〕に次のように記載されている。

「香美郡岸本浦飛鳥大明神の社地なる懲愆のいしぶみ。

川原とおなじき自然の大石へ、表より裏まで彫り廻す、懲愆、○碑の圖アリ今略シヌ諺に由斷大敵とは、深意のあることにて、假初におもふべからず。安政元寅十一月(四日脱力)の事なりき。朝五時頃、常に覺へぬ程の地震して、岸本の浦鹽のさし引十間餘の違あり、又手結の湊内も干揚りて鰻をうる夥し。同日兩度小震す。しかはあれどさばかり驚く人もあらざりしを、翌五日ハツ過大に震動すること三度、七時過大雷鳴の如きどろどろ響くとひとしく大地震す。こはいかにと衆人驚く程こそあれ、家蔵高塀器物の崩れ破る音、さらにいふ許なし、逃んとすれども目くるめきて自由ならず、ほ　う々々家を出けるに、津波打來りて、當地は徳善町より北の田中、赤岡は西濱並松の本、吉原は庄屋の門までに及び、又川尻の波は赤岡神輿休のほとりまでにいたり、古川堤、夜須堤も押切られて夜須の町屋など過半流失す。かくて人々は老を扶け幼を携へ泣叫びつゝ、王子、須留田、又は平井、天龍寺の山へと逃登りて命助かりぬ。此時國中の官舎民屋多く轉倒し、就中、高智下町、幡多、中村ともに失火ありて、一圓焼亡し凡て怪我横死何百人といふ事なし。幸甚なるかな、此地は神祇の加護によりて、一人の怪我もなく、彼山々に己家をかまへ、日を経るに随ひて震もいさゝか穩に成りしかば、恵ある

大御代の忝を悦つゝ、皆己が家に歸りきぬ。抑寶永四年の大變は、今を距こと百四十八年になりぬれば、又かゝる年數には必變事の出こんなどいふ人もありぬめと、世變はいつあらん事豫めしりがたし、されど常に兎あらん時は角と用心せば、今其變にあひても狼狽せざるべし。寶永の變を昔ばなしの如くおもひて、既に油斷の大敵にあひぬ。さるによりて後世の人々、今の變事を又昔咄の如く思ひて、油斷の患なからしめんがため、ことのよ

しほゝゑりて、此社と共に動きなく萬歳の後に傳へんとふるひおこしたるは、里人が誠心のめでたき限りにぞありける。千規たま々々高見の官合に祇役して、俱に彼の變事に、逢たれば、其よし書てよと人々の乞ふにまかせて、かくは記し侍ぬ。

穴賢。

安政五年戊午季秋穀旦

徳永千規 誌

前田有稔 書

澤村虎次 刻

次に、

施主二十三人の名を印、建之とは大字に彫りあり。こは元治元甲子九月十七日、山崎春成が寫し來れるをもて、こゝに記しぬ。この外國中地震ことにつきて、石ふみを立たるは、高岡郡、須崎の東の入口、

同郡、宇佐坂の麓、

吾川郡、浦戸、

長岡郡、里改田金毘羅の社地の石の玉垣。」

安政元年十一月四日(西曆 1854.12.23) (pp.166-167)

6-2 徳島県海部郡美波町志和岐東由岐

「〔志和岐浦安政津浪ノ碑々文〕○阿波國海部郡

去る嘉永寅七年霜月四日朝五ツ時大地震、不時に汐高満有、此時浦中家財を寺或は高き人家へ持運び、翌五日七ツ時亦々大地震、忽ち津浪押來り、船網納屋不殘沖中へ流れ失。浦人漸寺又は山杯へ遁登り、夫々無難に一命助りし事、全氏神諸佛の御加護也。依之又々幾後年に及大地震の節汐高満有之之時は、定津那み押來るべし。其の期に及少も為無油斷、荒々此石に彫記。長く子孫へ知せ置度而已」

安政元年十一月四日(西曆 1854.12.23) (p.371)

6-3 津波碑 堺市

「〔堺市史〕

現今大濱南公園内には花崗岩で造った高さ九尺一寸厚一尺三寸五分幅二尺八寸の津浪碑が建つて居つて、表面には「擁護璽」と記し、裏面には次の碑文が刻んである。

「嘉永七寅のとし六月十四日地震あら々々



震災碑



写真-2 志和岐浦安政津浪碑

しく、またも十一月四日朝、五日夕につよく
ゆり動き、五日はゆる々々、その沖のかた

おとろ々々しくなりふためき、暮なんころ
俄に津波たちて、川すしへけハしく込り、
引もまたはけしく、川通りに繋し船ともは、
碇綱され、棹さすちからたらず、矢庭に走
入り、そこよこへつきあてり、橋八つも
崩落ち、船はわれ或はつよく損して、見る
おそろしさいはんかたなし。地しん津波に
家潰れ、ぬりこめかたふきたるはさはなれ
と、里人は神社の廣庭に集りてさけ居たる
か、これかために一人も怪我はしたる人の
なきこそ、いと々々めてたかりける。餘所
の入江川筋には、地震をよけるに小舟に乗
り、家うち圓居し志たりがほにありけるが、
大船いやかうへ、高汐のためにはせ入に敷
かれて命落せしもの数しれすとや。まさに
川へ逃除たるゆへなり。ゆめ々々地震つよ
く川すしへ船に乗りさけることすましき
なり。むかし寛永年中にも、こたびにおなし
地震つよく津波もあり、船に除け居て命を
とらるしもの多しとや。かゝるためしもあ
きらかなれば、地しんつよければ、つな見
ありと知るべきなり。堺の人のつゝかもな
きありかたさに、産神神明宮、三村宮、天
満宮にそのよろこひの幣を捧げ、後の世ま
ても患のなきを祈りて賜りしをしてを爰に
祭るになん。安政元年十一月四日（西暦 1854.12.23）



擁護壘（正面）



擁護壘（裏面銘文）

写真-3 大浜公園の蘇鉄山の麓にある石碑（文献 6）

(pp.438-439)

擁護璽（安政地震記念碑）（文献6）によれば

「擁護璽(ようごじ)」は嘉永7年(安政元年・1854)に発生した地震災害に関する歴史資料です。嘉永7年の年は、6月14日に伊賀上野地震、11月4日に東海地震、11月5日に南海地震が相次いで発生し、堺においても大きな揺れと被害がありました。

11月5日夜には大津波が起こり、大坂では2000人近い死者が出る惨事となりました。

堺においても 8 つの橋が落ち、57 人の死者があったとの記録もありますが、大坂と比べると被害は少なかったようです。

現在大浜公園の蘇鉄山の麓（ふもと）にある本石碑は、花崗岩製の正面に大きく「擁護璽」と刻み、背面に砂岩の石板を嵌め込み、幕末の能吏、伊藤吉左衛門の撰による、建立の経緯が詳しく記されています。

6-4 吉城郡河合村元田分教場校庭の石碑

「安政五戊午年二月廿五日夜子の刻、飛驒、越中は起りし大地震は飛驒にては小鷹利郷、小島、下高原、下白川四郷七十ヶ村に亘り、全壊寺院九、民家三百十二、半壊寺院七、民家三百七十、即死者貳百三人、負傷四十五人、

斃死牛馬八十七。就中小鷹利郷元田村の荒町と立石は小鳥川を隔てゝ古より荒町に權平、長四郎、徳松、甚蔵、源右衛門の五戸、立石には三郎、久三郎、喜三郎、善右衛門の四戸あり。此時や向山の一角缺け飛んで川南荒町へ落ち、反動更に此岸の立石を衝きて九戸五十三人、其家と共に地底深く埋められ、唯一人荒町清蔵の娘おな奇しくも死を免る。震動の激烈思ふべし。

斯る遺跡の歳と共に世人の記憶の外に逸するを悲しみて、元田分教場主任鹽屋吉郎と河合村青年團元田支部員と相謀りて弔魂の爲此の碑を建つ。

大正十二年十一月上澣（注：カン。十日に
一度の休暇） 岡村利平撰文

永瀨 徵 書之 |

安政5年2月25日西曆1858.4.8 (p.720)

文献7には、次のような説明がなされている。「この石碑は、旧河合村立元田小学校跡地（飛騨市河合町荒町）にあって、そこには一八五八（安政五）年に発生した安政飛騨地震（飛越地震）のとき、この地であった想像を絶する悲惨な出来事が記されている。石碑は、その地震被害の記憶が風化しないよう一九二三（大正一二）年に作られた。碑文は



写真-4 元田の津波碑

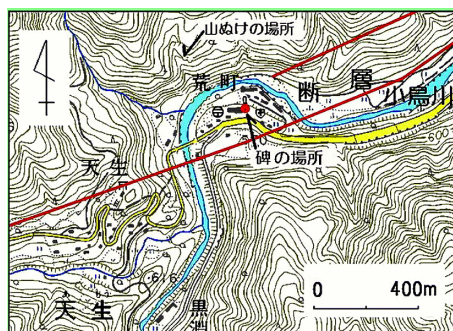


図-1 津波碑の位置

郷土の文人、岡村利平による。

地震は、四月九日（新暦）午前一時ころ発生した。碑文の内容には、向山の一角が欠け飛んで、荒町五戸と立石の四戸、元田の二村を含めた五三人が、その家とともに地中深く埋められたとある。

また、災害の古文書見舞帳の書き出しによると「大ぢしんうすり、あら町立石八は大きな山ぬけ、みなつきうめ・・・」とある。つきうめとは、山抜きの土砂が反対側の谷壁につき当たりあたりを埋めてしまうことで、現在荒町の集落はこの上に立地している。

石碑に近い所に元田商店（ガソリンスタンドと雑貨）があった。その主人の元田与喜三さん（一九九七、平成九年没）は、向山の岩石は、学校の跡地やもっと遠い元田鉾山（旧村営グラウンド）の所まで飛んだのだと熱心に話された。

河合村誌執筆者のひとりで村の歴史に精通されている永田忠臣さんの話によると、唯一助かった女性「おな」は当時の隣村の天生（あもう）へ子守に行っていたため難を逃れることができた。「おな」はその後、旧河合村保へ嫁いだそうである。

わずか一五〇年近く前の出来事で、数十年前には、親から直接聞いた話として、当時の様子を生々しくお話になるお年寄りが多くおられた。

現在この石碑の前に立つと、石碑の後、跡津川断層の北側には、地震のとき欠け飛んだ山の一部が大きく口を開けている。それも、

時代とともに草木におおわれようとして時の流れを感じさせる。

参考文献

1. 宇佐美 龍夫 (1979)：日本地震史料の恩人たち 田山実と武者金吉，地震第2輯 32 巻 3 号，
https://www.jstage.jst.go.jp/article/zisin1948/32/3/32_3_355/article/-char/ja
2. 東京大学地震研究所：安政元年 11 月 4 日東海沖地震に関する静岡県調査報告 明治 26 年，p.4, 1977
3. 首藤伸夫 (2017)：津波発生数値計算手法に関する疑問，津波工学研究報告第 33 号，pp.17-25.
4. 気象庁：三重県に被害を及ぼした主な地震
https://www.data.jma.go.jp>large_earthquake
5. 「村を救った子ども達」安政の地震津波（その 1）みえ防災・減災センター
https://midori.midimic.jp/bousai_gensai/ansei_kowaura_1.html
6. 擁護璽（安政地震記念碑）
<https://www.city.sakai.lg.jp/kanko/rekishi/bunkazai/bunkazai/shokai/bunya/rekishi/yougoji.html>
7. 跡津川断層 8 安政飛騨地震の石碑
<http://hidatigaku.starfree.jp/fault/fault3/funasaka/atotsugawa117.htm>